

奨学金を届けました

2014・3月現地訪問の報告

2014 年度の奨学金を届けるために3月 19 日から1週間、事務局の内田義博さん、石山路子さん、石山さんの友人、ボランティアの川野サトミさんの3人がカンボジア現地を訪問しました。奨学金を届けたのはプロモルプロム、タッコー、コンポントウラバイ、プレアンドウンの4高校で学ぶ高校生136人の年度後期分と、州都プレイヴェンの教員養成所1年生4人の14年度分でした。教員養成所入学が決まったのは昨年11~12月だったので、この4人は面接のうえ奨学金給付を決めました。このほか教科書、教材、学用品、スポーツ用具などを届けました。訪問した学校は前期4高校のほか4中学校、4小学校の計12校でした。

写真はタッコー高校出身の教員養成所学生に奨学金を手渡すところ。1列目は川野サトミさんから奨学金を受け取るチョーム・ティアヴィーさん、2列目は内田義博さんとコン・タヴィーさん。後方の左側に石山路子さん、通訳兼助手役のナットさん、右側にチア・ソティ校長先生ら（タッコー高校で）。

（4頁に続く⇒）





リティ・パン監督

「恐怖の時代」描いた異色ドキュメンタリー

アカデミー賞外国語部門の候補に

カンボジア映画初のノミネート

カンボジア人の映画作家リティ・パンさんが「ポル・ポトの恐怖政治」を描いたドキュメンタリー映画「失われた絵」(英語タイトルはThe Missing Picture)が今年のアカデミー賞外国語映画部門にノミネートされている。同映画は2013年のカンヌ国際映画祭で「ある視点」最優秀賞を獲得している。カンボジアの映画がアカデミー賞候補になったのは初めて。プノンペンでは先月上映されて若者を中心に多数の観客を集め、国民の間で受賞への期待が高まっている。

カンボジアではベトナム戦争の「裏戦争」として1970年に米国が後押しするクーデターで右派軍事政権が成立、左派勢力クメール・ルージュとの間で内戦が始まった。クメール・ルージュを主導するポル・ポト派は1975年4月に全土を制圧すると、都市住民を全て農村の強制収容所に閉じ込め、農作業や灌漑工事に狩り出した。対立するベトナムが反ポル・ポト派を押し立て1979年1月、親ベトナム政権(現在の政権につながる)を樹立するまでに、人口700万人のうち200万人が過労、飢餓、処刑などで命を失った。

ポル・ポト派は極端な反西欧主義をとり、カンボジアを外部世界から遮断したうえで通貨を含めて仏植民地時代の制度や文化の遺産、痕跡を徹底的に抹殺しようと試みた。このため恐怖の4年間に何が起こったのか、虐殺された人たちにどんな人生があったのか、それを具体的に伝える記録、映像などはほとんど失われてしまった。パン監督はわずかに残された断片的な資料を探し出し、つなぎ合わせながら、自分自身の体験や生き残った人たちの記憶をたどって、粘土でつくった人形たちに「恐怖の時代」を演じさせる手法をとった。これがこの異色のドキュメンタリー映画を特長づけている。

パン監督は11歳から14歳までこの時代を生き抜き、フランスに脱出した。両親や家族は誰も生きのびることはできなかった。パン監督はこれまでもポル・ポト政権を告発するドキュメンタリーや劇映画を制作し、評価されてきた。「失われた絵」はカンヌ映画祭「ある視点」最優秀賞を受賞した後、東京で開かれた国際映画祭の特別招待作品の一つとして上映された。



カンボジアの人たちの多くは、ポル・ポト時代のことを語りたがらない。恐怖の日々を思い出すのも怖いという思いがあるからだろう(上の写真は、同映画の強制労働の1シーン)。しかし既に4半世紀が過ぎて、大虐殺を体験していない若い世代が社会の中心を占めるようになった。生き残った人たちは、あの民族体験を風化させてはならないとも思っている。

KEAFの友人ソワンさんもその世代だ。「失われた絵」を若い人たちは大勢観に行ったけど自分は行かなかったという。やはり複雑な思があるからだろう。

カンボジアの強権政治は経済の高度成長をもたらしたものの、権力の乱用、腐敗・汚職をまん延させ、貧富格差拡大が極まって、国民が不満の声を上げ始めた。そのなかで文学や美術など文芸の復興も進んでいる。「失われた絵」はカンボジア人の文化への自信と誇りを強めさせるに違いない(左の写真は同映画のポスター)。

米美術館などが6体返還

《カンボジア昨今 その2》

カンボジアの歴史遺産が「帰国」

ポル・ポト政権の恐怖政治から内戦へと混乱が続いた時代に盗掘・略奪され、米国に流出していたカンボジアの歴史的な文化遺産の石像6体が陳列・保有されていた米国の美術館やオークション業者から返還される。もう1体は美術館側が「略奪された証拠が見つからない」と主張、双方で調査を続けることになった。

これらの文化遺産はアンコールワット時代直前の10世紀半ばの短い期間、首都がおかれたコーケルのプラサト・チェン遺跡群から1970年代の内戦の時期に国外に持ち出されたとみられている。

プノンペンの英字紙、カンボジア・デーリーおよびプノンペン・ポスト両紙によると、返還されるのはニューヨーク・メトロポリタン美術館から一對の膝まづく戦士、カリフォルニア州パサデナのノートン・サイモン博物館からレスラー像、デンバー美術館から首のない猿神像、著名なオークション業者クリスティーズとソトビーズから各1体。ソトビーズはアスリート像の返還を拒否して裁判に訴えていたが敗訴した。

世界各国の貴重な考古学的な遺産は美術品としても価値が高いものが多く、盗掘や略奪によって世界の闇市場に流れる。国連（ユネスコ）は1970年にこうした歴史遺産の取引を禁止する議定書を採択した。議定書は遑って適用されないが、カンボジアから流出したのは議定書が成立した後なので返還の対象とされた。

しかしクリーブランド美術館は1982年に入手したという猿神坐像について、独自の調査によってプラサト・チェンの遺跡から出たという証拠がないと主張して返還に応じていない。

地元のプレイン・ディーラー紙によれば、同美術館

は背丈93センチのこの坐像をワイヤーで釣り上げるなどして（写真：プレイン・ディーラー紙の電子版より）軽量プラスチック性のレプリカを造り、今年初め館員をプラサト・チェンの遺跡に派遣して、レプリカがぴたりと収まる台座を探したが見つからなかった。坐像の材料は赤灰色の砂岩で、これも返還されるほかの石像と違うと指摘している。

「猿神坐像」は調査継続

カンボジア側のユネスコ関係者や専門家はこれに対して、レプリカに合う台座がみつからなかったのは盗



掘の際に坐像の左足が膝から下と、右の足首から先が切り取られたからだ、周辺一帯の石切り場からは赤灰色砂岩も出る、などとクリーブランド美術館の主張に反発している。カンボジアのユネスコ代表は外国の専門家も加えた現地調査を計画しているという。

プノンペンの国立博物館は7体の返還を受けて近く、展示会を開催する準備を進めている。

プラサト・チェン遺跡にあった文化遺産はフランスにも10体ほど流出している。フランス政府は内戦中にプノンペン政権から破壊を免れるために預かったとしており、返還に応じるといっている。

東京・上野の国立博物館はアンコールワット文明を彩るシャカ像、ビシュヌ神像、アスパラ（舞姫）像などを多数所有し、2013年7月から1年間、展示していた。これらは第二次大戦末期に日本軍が仏植民地統治下のカンボジアに進駐した際、フランスとの間の交換協定によって獲得したものだという。

（『カンボジア通信67号』2013年6月の記事「メトロポリタン美術館が2体返還へ」の続報です）。

4

ありがとうございました

(2014年2月15日～5月31日)

年会費、寄付金、奨学金を振り込みくださった方々に心からお礼申し上げます(敬称略させていただきます)

(東京)	(神奈川)	(東京)	(神奈川)	(東京)
(東京)	(東京)	(東京)	(東京)	(東京)
(東京)	(東京)	(東京)	(東京)	(東京)
(東京)	(東京)	(静岡)	(東京)	(神奈川)
(大阪)	(東京)	(埼玉)	(東京)	(東京)
(東京)	(東京)	(東京)	(東京)	(神奈川)
(東京)	(ドイツ)	(福岡)	(藤沢)	(静岡)
(東京)	(宮崎)	(神奈川)	(千葉)	(埼玉)
(神奈川)	(東京)	(埼玉)		(神奈川)

※お名前は個人情報なので伏せて掲載しています

※写真つき奨学生紹介の5、6、7頁は個人情報保護のため省略

◇物品の支援ありがとうございました

- ◎ (東京) : 背負い型、肩かけ、手提げなど各種バッグ 20 点。
- ◎ (東京) : 各種バッグ大小 7 点。
- ◎ (東京) : 手提げカバン 10 点

◇P・プロム高校に新校舎

12 年生の 2 部授業が解消

KEAF の支援学校の拠点になっているプレアスダイ地域のプロムプロム高校に新校舎が完成しました。カンボジアの農村ではまだ珍しい 2 階建て 12 教室 (写真)。



新校舎ができて 12 年生 (日本の高 3) の 2 部授業は解消されたそうです。カンボジアでは小学校から高校まで、大都市を除けばほとんどの学校が 2 部授業だからこれも珍しい。

広々とした図書室もある (右の写真)。ポーン校長以下の先生も生徒も大喜びでした。



◇教員養成所に“なでしこ先生”

KEAF が 2013 年から奨学金を出している州都プレイヴェン市の教員養成所で、清水千恵実さんという若い日本人女性が先生をしています。昨年 10 月「サッカー教室」で訪れた岡宮さんたちと町なかで出会い、「あれ、日本人だ」とお互いにびっくりしました。同市で日本人に会ったことはなかったそうです。たった 1 人でカンボジア人学生に日本語を教えながら生活しているとのこと。日本の若い女性は元気ですね。



大学を出て 3 年間神奈川県で小学校の音楽の先生をしてから、海外協力事業団のボランティアに合格して 20

13 年から 2 年間、日本語を教えます。

3 月に現地を訪問した内田さん、石山さん、川野さんが食事に誘い、市内のベトナム人経営のホテルのレストランで「情報交換」をしました (写真)。